

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530917

研究課題名（和文） 学力と就労の関係性に関する実証的研究—「相対的な学力」の概念を鍵にして—

研究課題名（英文） A Study on the Relationship between Academic Performance and Work: with Using the Concept of “Relative Academic Performance”

研究代表者

山内 乾史（KENSHI YAMANOUCHI）

神戸大学・大学教育推進機構・教授

研究者番号：20240070

研究成果の概要（和文）：本研究においては、従来の「絶対的な学力」、すなわち、テストスコア等による学力序列ではなく、「相対的な学力」、すなわち、クラス内等集団の中での相対的な位置という意味での学力によって、生徒、児童、学生の学習意欲と進路を、日英比較を通じて考察した。その結果、仮に「絶対的な学力」において同等であると判断される場合でも、「相対的な学力」が異なれば学習意欲、進路に顕著な違いが見られるケースがかなりあることを発見した。

研究成果の概要（英文）：Until now, there are many studies which focused on “absolute academic performance” that means test score etc. But we examine student’s learning activities and the situation about setting to work by focusing on “relative academic performance that means the relative position of academic performance in the class etc.

We have examined this in Japan and United Kingdom.

As a result, we have found there were many cases that there was a big difference by the “relative academic performance” even if the “absolute academic performance” was all the same.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：学歴社会、若年就労、学力、日本の教育、イギリスの教育

1. 研究開始当初の背景

現在、日本では、学力論争が一段落し、各

種テストに基づく、冷静な学力分析が数多く行われている。しかしながら、その研究のほぼすべてが「絶対的な学力」、すなわちテスト・スコアによるものである。もちろん、これらの研究が貴重な知見を獲得してきたことを否定するわけではないが、しかし、「相対的な学力」の視点から分析してみると、違った重要な知見を獲得できるのではないかと考えた。以上が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

これまでに学力の研究は再三行われ、また若年就労の研究も再三行われてきた。ただし、この両者をダイナミックに結合した学力＝就労調査は十二分に行われてきたとは言えない。本研究では、この課題に着手するに当たり、鍵となる概念として、「絶対的な学力」ではなく、「相対的な学力」を提唱する。従来の学力の研究の主力は「絶対的な学力」に重点を置くものであった。しかし、これに劣らぬ重要性を持つ概念として、「相対的な学力」があり、この概念は集団内での相対的な位置を重視する。この「相対的な学力」の概念をキーワードにした学力＝就労調査により、これまでの研究の蓄積に、全く異なる視角からの新たなる知見を加えることができると考える。不安定就労に従事する若者には欧米と日本とでは大きな差異があり、その日本の特徴を「相対的な学力」を中心に考察することが目的である。

3. 研究の方法

研究目的の欄において述べたように、本研究は、日英両国において、先行研究を徹底的

に検討し、理論的枠組みを構築しつつ、質問紙調査、インタビュー調査を行い、実証的に取り組もうとするものである。質問紙調査、インタビュー調査はすでにパイロット・スタディを実施済みであり、質問紙・インタビューの内容をさらに精査して行うこととする。特に重要な点、本調査の特色は低学歴者だけでなく、高学歴者（日本においてはこの層から不安定就労に従事する者が輩出されている）のキャリア・パターンをも重視するという点であり、本研究ではこの点を明らかにするような研究計画・方法をとることに格段の配慮をした。

4. 研究成果

これまでに学力の研究は再三行われ、また若年就労の研究も再三行われてきた。ただし、この両者をダイナミックに結合した学力＝就労調査は十二分に行われてきたとは言えない。本研究では、この課題に着手するに当たり、鍵となる概念として、「絶対的な学力」ではなく、「相対的な学力」を提唱する。従来の学力の研究の主力は「絶対的な学力」に重点を置くものであった。しかし、これに劣らぬ重要性を持つ概念として、「相対的な学力」があり、この概念は集団内での相対的な位置を重視する。この「相対的な学力」の概念をキーワードにした学力＝就労調査により、これまでの研究の蓄積に、全く異なる視角からの新たなる知見を加えることができると考える。不安定就労に従事する若者には欧米と日本とでは大きな差異があり、その日本の特徴を「相対的な学力」を中心に考察することが目的である。この認識に基づき、われわれは日英両国において質問紙調査と聞き取り調査を実施し、相対的な学力が生徒・学生の進

路にいかなる影響を及ぼし得るのかを考察してきた。われわれは日英両国においてインタビュー調査と質問紙調査を行い、その成果は後掲の二冊の書籍にまとめた。

結論を一言で言うならば、日英両国とも「絶対的な学力」による考察だけでは明らかにできない事実を「相対的な学力」による考察によって明らかにすることができるということであり、局面によっては「相対的な学力」が決定的要因であることもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 山内乾史、原清治、講演『使い捨てられる若者たち』は格差社会の象徴か、生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究、国立教育政策研究所、査読なし、2013、126-154
- ② 山内乾史、『遊び型』学生になるのは誰か?、教育総合研究叢書—高校生の進路と将来設計に関する意識調査の分析—、総合教育研究紀要、査読あり、別冊第 5 号、2012、35-44
- ③ 原清治、「つながり」の関係づくりを中心に置いた中途退学者ゼロを目指す取り組み、私学経営、査読あり、第 450 号、2012、18-29

[学会発表] (計 3 件)

- ① 原清治、Searching for effects about Teacher's Training、東アジア教師教育研究国際学会、2012 年 12 月 06 日、華東

師範大学

- ② 山内乾史、原清治、『使い捨てられる若者たち』は格差社会の象徴か、国立教育政策研究所「生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究」例会(招待講演)、2012 年 12 月 05 日、国立教育政策研究所
- ③ 原清治、実践的教員養成の効果に関する実証的研究 (VI)、日本教師教育学会、2012 年 09 月 08 日、東洋大学

[図書] (計 2 件)

- ① 山内乾史、原清治編、学文社、学生の学力と高等教育の質保証 (II)、2013、220
- ② 山内乾史編、学文社、学生の学力と高等教育の質保証 (I)、2012、216

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 乾史 (Kenshi Yamanouchi)
神戸大学・大学教育推進機構・教授
研究者番号：20240070

(2) 研究分担者

原 清治 (Kiyoharu Hara)
佛教大学・教育学部・教授
研究者番号：20278469

米谷 淳 (Kiyoshi Maiya)
神戸大学・大学教育推進機構・教授

研究者番号：70157121

(3)連携研究者

なし